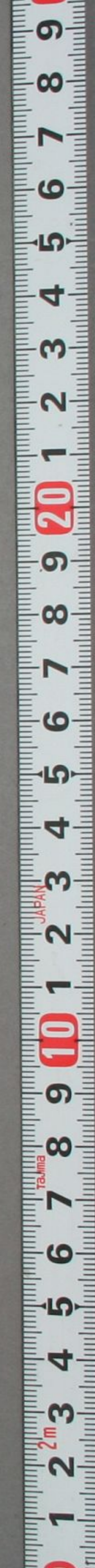


牛在漫報 乾

茶屋の録  
山田一平の死  
雪山山田一平と傳説  
車馬存の故の方  
道一平に誇り  
書物の伝

特別  
1919  
212



○修ん、まか裸体画の海りのお物種をのまきちを  
 幣——にお菊岡が取入さんとするをえらる  
 此のきりいりよこ——にお菊岡をうらひく油へ  
 てるんと表而へぬ入の外——に扱う透えん見  
 るのかおきき舞うつときおと油のうへまて中ま  
 コロタイプの修りき板挿入してある、即ち左  
 へ貼りし——油のり油漬の供す——にうがさんひ  
 ある、まけはこを板こきえらるき——の價かある  
 とすの



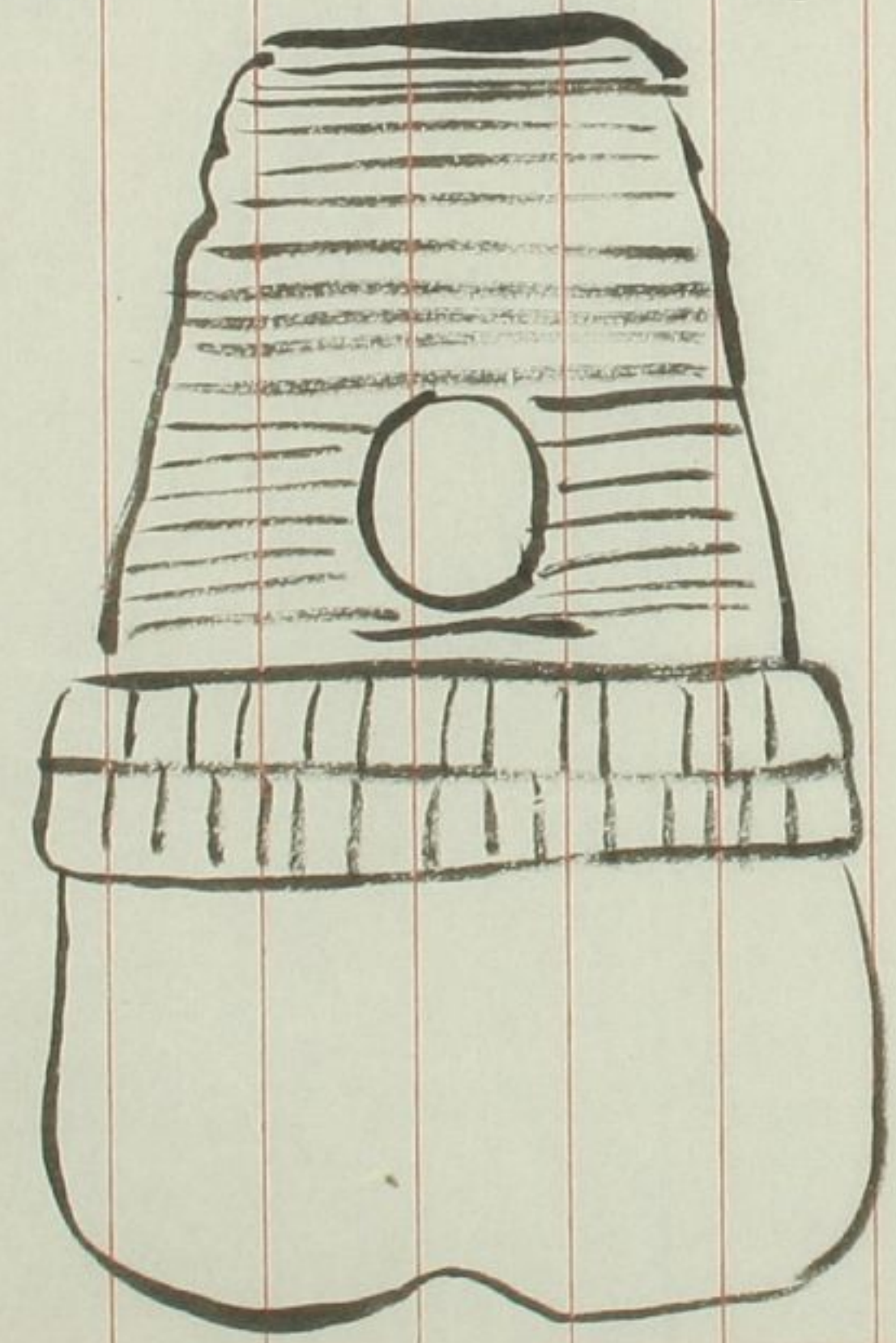
牛込色紙  
 島講吉標  
 牛込

名づくも... 此の色の記しを... 塚つに... 此の色の記しを... 此の色の記しを... 此の色の記しを...



部筒封村中 載轉許不

この... 井... ことき... 御... とお... 随... 此... 古... 又... 出... 由... 未... 又...



り... 出... 由... 未... 又... 出... 由... 未... 又...

啓者本行代理、日本政府特許、精巧鮮麗、天下一品也。  
 接到一箇封筒、隨運到切實、封筒完、搜檢、搜檢、搜檢、可得抽出、美術的畫圖矣。

助業田嵐者明登  
 九七八八二號番願許特  
 郵筒封村中京東元遠製

BILLEI FUTO  
 NOTICE  
 Open envelope along the perforation and take out the picture piece from an inside of the surface cover.

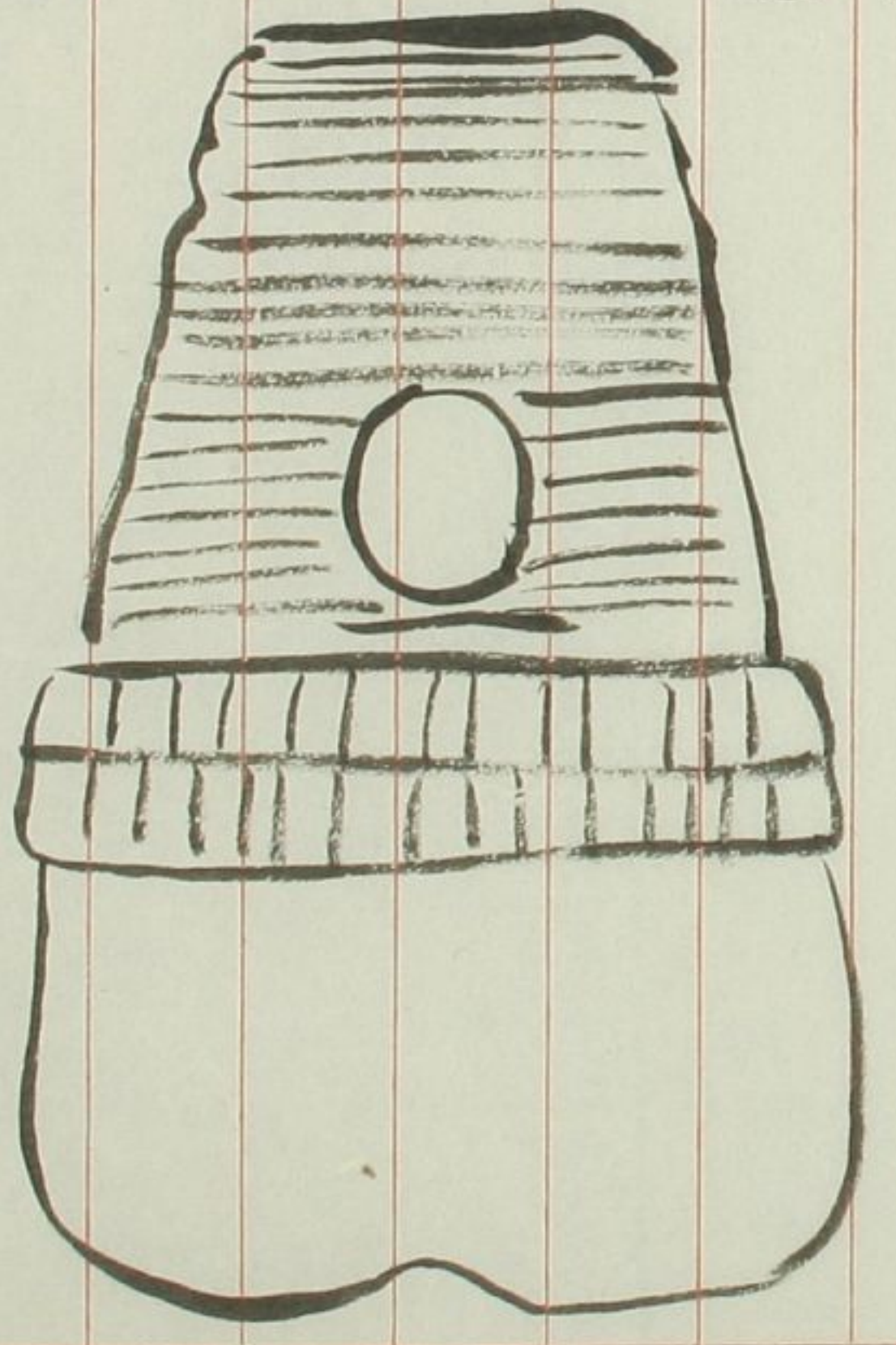
封筒の裏に  
 日本郵政の  
 切實に  
 封筒の裏に  
 日本郵政の  
 切實に

此の石を二つ獲れ、俗に子婿の石の利業と  
 名づく。この石は、此の石の形をうつる石の  
 垢つた中、この石の形をうつる石の形は  
 此の石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 此の石の形をうつる石の形をうつる石の形は

東林堂製

この石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 つうやういふ、此の石の形をうつる石の形は  
 こときき者者を獲れ

此の石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 此の石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 此の石の形をうつる石の形をうつる石の形は



この石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 この石の形をうつる石の形をうつる石の形は  
 この石の形をうつる石の形をうつる石の形は



不許轉披 中村封筒部

此瓶の上へ付て後をまへるものを出東  
 ちんが性も古代のものと似るもの  
 於るを大なる貝殻を掘削りしと  
 瓶を摸しと考へしものなり  
 又又定座古墳の混しと貝殻  
 の掘削りのものなり  
 此のいふものなり  
 を石に換へしものなり  
 古墳の出土するものなり  
 の貝殻を以て作るに  
 石輪車と  
 石輪車と

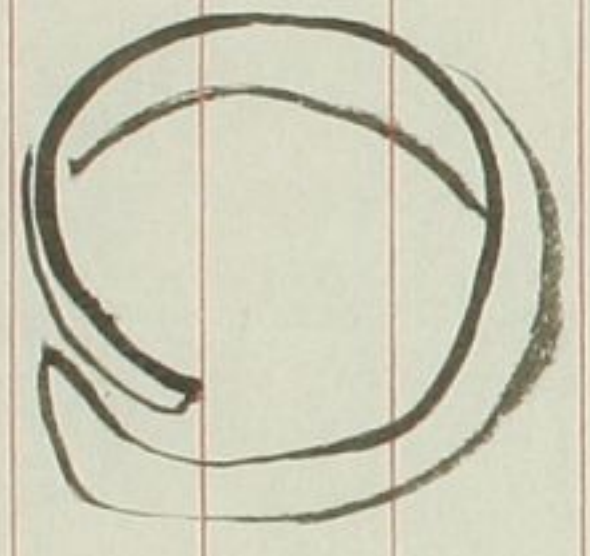
東林堂製

このつちとびはつちを  
 行くのときを現  
 するものなり

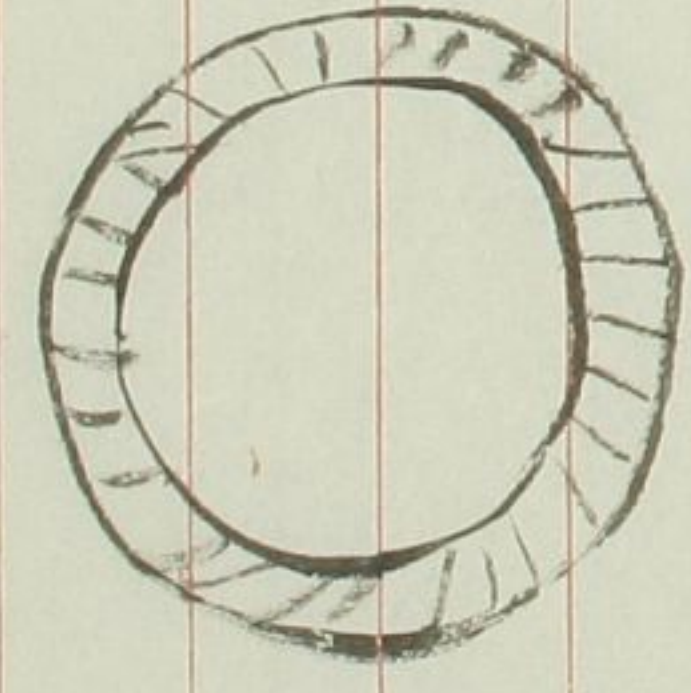


貝の全形

これを輪切り



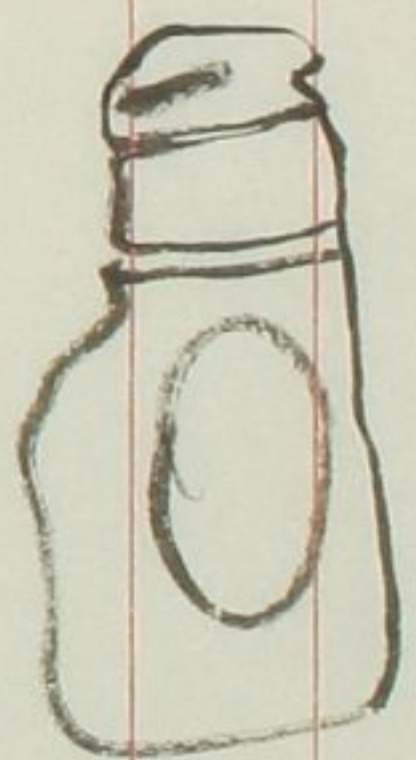
石を石に  
 換へしものなり



石輪車

経刻り  
と

三をえんか  
摸し  
思ふん



此石也其の妻也...  
甲子一の...  
一...  
つ...  
う...

東林書院

ふ...  
曲...  
あ...





自ら刻しそを、李子の印二顆の印、墨と赤  
石門人の轉成法意の印、墨を墨と赤と、こ  
せよ。 中は収め、豆を、李子の印一、白  
文の七碗、七法、七十篇と刻し、その毛、極細  
うい、流の刻、古れ、う、い、流の、う、う、こ  
ひと、李子、う、山、本、眠、翁、の、う、う、刻、し、こ、の、  
筆、を、李、子、解、あ、う、う、う、七、法、を、う、う、う、  
紫、う、古、師、あ、う、う、う、此、の、流、を、換、わ、り、の、う、あ、う、  
又一顆、を、朱、文、の、放、鄭、翁、の、速、傳、人、と、刻、し、あ、う、  
法、意、の、刻、を、印、せ、し、見、た、う、う、う、河、の、流、に、あ、う、  
七、を、朱、文、の、松、竹、梅、と、刻、し、あ、う、う、う、の、う、う、う、

東林堂

~~~~~ 彫りこき

彫り法意あり人、美河又言ぬ、象刻、從三原  
李子の印、北印、水戸人、鈴木公泰、田村後  
村、千町、田石、谷山、物、流、下、且、為、余、所、貯  
こじ、曉、寺、次、故、也

○大なる梵網經を軸を獲比、えんを宋版、○中心  
の上出来の方、心書体、謹嚴、而、も、法、屈、の、欠、せ  
か、う、う、こ、う、う、味、の、あ、う、楷、書、比、善、し、宋、版、の  
見、を、と、う、う、う、う、う、う、へ、き、者、の、あ、う、南、都、白、毫、寺  
の、日、卷、の、あ、う、う、う、う、梵、字、を、ま、い、え、り、風

訪るる里中を採しを女。

○草物や花を採つてはさうく、客の某女ありて或  
の病を治すに草を採りては、  
三言を採るの採物を知りて、  
新えたる一二の例を採りて、  
采採ふ。さうかひ採りて、  
キキと誰の病を治し、  
ころろそん、  
紫心せし採る秋露、  
馬郡石井其こころの病を治す、  
白梅種

東  
林  
書  
院  
印

ころろそん、  
ふねと云い、  
ろとふかき、  
ころも、  
名採る、  
採つて、  
又名採る、  
ゆへ、  
いふ、

つひつひと云ふ事曰くつひつひと云ふ事也といふ事  
云は月と候と云ふ

○藤原未蘇の内に誇る事ある事云々  
つひつひと云ふ事而等しく東方紀事云々  
叔孫康叔不誇其基、何ら誇り不誇飲造、司馬光宣不  
誇清約、大抵不誇也といふ人持る事云々  
曰くつひつひと云ふ事

○陶犬瓦馬と云ふ事云々云々酒の價り云々  
名亡又も唯客書あり云々云々  
と云云云々云々、其云々曲高寡知音於否

東...

君臣謹淡談笑老男、忽則唐法尤自者何事  
中貴人養有南丹仁和者、亟令進之、偏賜宴房  
上亦頗愛洞其侯、中貴人以實爲、上遂洞洞  
臣曰、唐酒每升三十、上曰安知、丁曰臣嘗讀杜甫  
詩、曰蚤來就飲一斛酒、恰有三万青銅錢、是  
紙一升三十錢、上大喜曰、南之詩自可爲一時之  
史也

○曰昔又云、漢代有(漢)の錢の事云々  
考公譚紹、(前)世錢又未也、草書者、漢代中  
太宗始以宸翰爲之、既年以賜也、臣、王元之有詩

云、福官を伴完と烟、唯披習者書日眠、遊之一  
般勝日遊壺、事心中貯希有條、とあるは太宗  
の御事なることを知るべし

○各家をみるは、花をぬき二守にその花をぬ  
て三守玩携うす、さもさぐり中、花をぬきぬき  
好むと各家あり、唯これぬきぬきぬきぬきぬ  
きぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ  
大けあつとて花をぬきのぬきぬきぬきぬきぬ  
徳利は向のぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ  
ぬきは自ら花をぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬ  
継古葉編に古物花瓶入土年久受土氣深以之

春也、花も鮮明、或瓶は空、陶玉亦也、其式  
以膽瓶小方瓶のみ、又袁宏道、瓶史二  
七古物器入土年久受土氣深、以養花、花も  
鮮明、如枝却凋速而謝、是瓶は空、亦也、故  
知瓶之變也、非獨以玩

○此大瓶も、いまの母も、けりといふも、是を  
家のことなるを、はし、つし、つら、よ  
誤る、是を空瓶を、横所を何のつし、と  
んば、是のつし、といふ、説も、も、職、人の  
歌合、主人は、入りの圓も、入りの、ハ、リ、の  
うら、なる、つし、つら、つし、ハ、府子の、あ、

その傳を、今のキキを各の條に  
○此を、あし年志をうりこと、佛典を出し、こと  
と思ひ、あのこと、佛典、こと、出、こと、こと  
の佛を、漢字、終、こと、二、天、こと、佛、佛、を、施  
わ、こと、の、こと、あ、こと、こと、ゆ、大、は、こと、こと、  
佛、佛、流、日、儒、を、用、あ、こと、事、に、佛、佛、  
者、年、志、の、事、本、こと、一切、の、こと、こと、  
り、事、納、こと、西、十、三、年、志、を、撰、中、納  
言、是、を、終、こと、事、あ、こと、佛、佛、の、事、  
こと、を、同、こと、事、北、あ、こと、西、の、事、佛、佛、  
二、四、十、九、こと、事、あ、こと、事、佛、佛、の、事、

東京  
東大  
印

を、佛、佛、年、志、の、事、あ、こと、事、京、相  
あ、事、瑞、氏、一切、を、終、こと、事、  
是、年、服、志、の、こと、事、佛、佛、  
道、を、佛、佛、の、こと、事、  
う、ん、こと、事、四、十、九、こと、事、佛、佛、の、法、と、あ、こと、事、  
該、佛、佛、の、事、七、七、之、事、不、始、於、唐、按、北、史  
胡、國、珍、死、親、明、帝、為、奉、衣、詔、自、始、其、至、七、七  
皆、為、設、千、佛、事、帝、令、七、人、出、家、闍、人、孟、榮、死、  
靈、大、在、於、其、事、設、二、万、佛、事、北、史、載、成、帝、  
寵、和、士、崩、將、幸、晋、陽、而、士、崩、母、死、帝、聽、其、  
言、乃、後、續、事、又、孫、聖、暉、為、南、陽、王、綽、師、

緯死毎至古、聖律為清僧設、此則做七之明  
證、蓋起於元魏北方也、按元魏時、道士寇讎  
之教盛行、而道家練丹拜斗、率以七七四九  
日為期、遂推其法於送終、而有此七七之制耳、  
此乃佛流之法、及家之法、  
を考ふと、七七の教を、曰く、  
と引く、人之初生以七、為臍、死以七、為忌、  
一臍而一臍成、一忌而一魄散、  
此乃七七の  
説推して考ふべし。

○五月廿七日、珠珀を古物と説



と説く、  
る二十冊と、  
集場を、  
之流を、  
ひき、  
自分の、  
と、  
入ん、  
天

紙の人川上松島と云ふもの、不庵の書画の巻款  
をあらためたに、この珠玉といふもの、かゝるものか、  
此の本の珠といふべきを、昔名海を、日内本等の  
序文が、喜望峯の歌の次き、挿し、ある一事  
ひある、珠玉を、人の修を、修んば、天照  
命が、海原に、序文を、清ふに、と、き、海原を、と  
甲一と、二通と、認め、こんを、天照命と、出づ、これ  
大島、海を、其の、由一、通と、刻し、と、き、お、んを  
装束し、他の、一通の、原形を、別、版、中、の、中、の  
ゆ、り、珠、玉、し、重、き、し、う、終、の、後、も、人、の、手、  
入、ゆ、り、せ、る、也、と、き、ふ、此、の、今、文、の、ち、の、刻、を、こ、る

東林堂製

佐々木、い、摘、芸、人、也、書、於、鴨、上、水、木、精、華、之  
處、□□と、ある、が、版、も、さ、う、な、の、と、ん、な  
ち、の、事、も、さ、う、な、今、を、比、較、する、と、お、ん、を  
馬、を、さ、い、う、と、他、の、昔、也、を、切、す、の、ゆ、え、  
言、ひ、た、り、あ、る、集、ん、を、後、附、の、印、を、  
採、つ、て、さ、う、な、事、も、さ、う、な、寺、院、を、長、を、  
か、あ、る、と、附、載、し、と、あ、る、か、い、つ、て、い、ふ、  
う、か、古、事、も、さ、う、な、仲、の、話、も、あ、る、ゆ、え、未  
だ、確、定、せ、ぬ、と、断、定、し、が、た、い、扱、ひ、を、さ、す、  
後、考、を、林、道、を、釋、の、の、め、を、さ、す、果、し  
と、北、人、の、書、蹟、と、い、ふ、は、一、十、百、も、さ、う、い、ふ、の、い、ふ、

ふ、東山の鄭軍、魏を討つ、石を入る、石を  
くつ本をホし、江中の新少易の書入る、石もあつた、即ち  
八大家の評點を附し、江の石もあつた、蘇の石も  
蘇の石もあつた、評の石もあつた、書の石もあつた、書の  
朱布心、石の石もあつた、何の石もあつた、三の石もあつた、  
石の石もあつた、各の石もあつた、魏の石もあつた、  
附し、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
の書入る、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
の上決する、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
○珠は石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、



一、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
二、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
三、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
四、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
五、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
六、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
七、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
八、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
九、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、  
十、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、石の石もあつた、



王とあり  
楊守教  
の漢字

王の楊の後也

を言つて此を程うし生針のさつて行はさし  
ししてそつしに、王の書物に用指しいるに  
この言のいさふ、表に手習をしたとするに  
のむとさし、此の各隨各次第のさつに  
例をいへば、元版と朝鮮版の異なるに  
はした、その自ら分る朝鮮版に  
法多しと評言に出す、王とさしし  
あり、さつしと元版のさつに  
あり、明主のさつに、海を越えて  
元版のさつにさつとさつと、元版  
其の元版を出さしとさつと、元版

東京  
漢字  
研究  
会

諸君の申し、ついでに、言ふに、  
式をいへば、ついでに、朝鮮  
本にあり、ついでに、ついでに、  
十の八を、ついでに、ついでに、  
と、朝鮮版とさつと、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、  
即ち、ついでに、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、  
ついでに、ついでに、ついでに、







おもあふまゝいとまふり後故を夢えし如めを於惑  
を教ふことのゆるさ此のしるふあする後味を一層  
深くくしえん

○上宮美新伝存に開存にぬ女存に於て宮目  
の別名中一 千帳に存せしものを摘記す  
ことめ先(五月ホロ)

一 播州松樂寺瓦経

硯よりり

片野色平花

雅臥愛下(一)

一 伏阿法師作

東林書院

人麿像

北野百体

日上翁

一 浅部桐子手紙

此紙のしる四五出海しあうんんん

此のしる目と悉けり

中村作のり翁

一 和名塔儀用三方

森内色石翁

一 伊達正之丞書簡

妹尾武翁

一 鞆竹糸高

鞆の上頭 襟帯は蒸し用  
糸は果ては二枚 袴は二枚  
二枚 袴の食器は花子 馬上  
飲食は 男成服十枚 女成服  
二枚

一 土風炉の切片

三枚

片桐岩見守 土風炉の片桐岩見守 正雨面を  
代わり 袴は二枚 袴は二枚  
三枚 袴の食器は花子 馬上

孝人 袴は二枚 袴は二枚  
袴は二枚 袴は二枚  
袴は二枚 袴は二枚



一 松平 糸高 袴 二枚

順子 袴 袴 袴

一 由井 正雪 袴

袴

袴 袴 袴

一 堀川 文新 袴

袴 袴 袴 袴  
袴 袴 袴 袴  
袴 袴 袴 袴  
袴 袴 袴 袴

一 文字の石

白の石に雨の一字を印する所の  
六七個 字の章一休七行七  
丁の石に「の」の字あり 此の石は  
池の石に「の」の字あり 後十  
の字ありし 中井の石に  
「の」の字あり 此の石は

外、青山の石の石一個あり

石の石の石の石の石

城の石の石の石の石

一 石の石

石の石の石の石の石の石の石の石



石の石の石の石の石の石の石の石  
天正年中 峰の石の石の石の石の石の石の石の石  
川原寺の石の石の石の石の石の石の石の石  
前之石の石の石の石の石の石の石の石  
破損せる石の石の石の石の石の石の石の石  
此の石の石の石の石の石の石の石の石  
石の石の石の石の石の石の石の石の石

一 石の石の石の石の石

石の石の石の石の石の石の石の石

一 松浦神託古記

鳥羽のしよ

作中長記

一 尊田記と清和文

ふ書海行忠之存

一 天竺伝景自草

石白しよ 零の巻

大に船二存

其書とていふことなるも改らざる也



一 梅取急巻草

小松極早存

酒の程と回

えきや暢さるるも飲るにまづこれの  
也急巻の程とぬくくくくくくく  
此回りのこととて稀にのしよの也

一 丈記抄

杜ふり集

又存二三三

帝田大なる回書  
ふんむくしよ一巻を伝す  
是の故に存也



一 板花を消息 四板一冊

里川直らるる花

一分川の倍速也

永徳二年二月十日

花のゆく

此のふた巻の花 宗政の傳に散在すむの古画  
花のゆくも数多く出陣しあらんはるる  
の味を絶へたるに上未列記の果て也

東棧書院

○和作書と目録とあるものありしにその法は  
りしにさつたつたやうなるにそはるる花を  
専らとてあつて例へば是万回位もなきと  
き物を一冊に集めよとてしつてつて  
一寸の間を集めよとてつてつてつてつて  
実際をいふに花の二巻集まるといふは  
かゝるにそのはるる、  
換きの足とをもちつてつて何處とつて高  
とつてつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつて  
くのはるる花といふはるる花といふは  
花のゆくといふはるる花といふはるる花



丹と飲して是千田むうものもを買んと或んを  
あり古作を漁つたらどうしてもそんな物の書物が  
見つゝうらうらん此一早稲田の園書館と表に  
船んはとらうのうらうらうのうらうらうのうらう  
○山の方角もさあつてもうらうらうらうらうらうらう  
つら前年らうらうらうらうらうらうらうらうらう  
とてうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
此のふたの庭を得たらうらうらうらうらうらうらう  
いらいらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
長い書字又さあつてもうらうらうらうらうらうらう  
と、あつたらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう



の集式をさあつてもうらうらうらうらうらうらう  
のここのうらうらうらうらうらうらうらうらう  
山のふたの園を得たらうらうらうらうらうらうらう  
つら前年らうらうらうらうらうらうらうらうらう  
とてうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
此のふたの庭を得たらうらうらうらうらうらうらう  
いらいらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう  
長い書字又さあつてもうらうらうらうらうらうらう  
と、あつたらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう





そんを扱ふ所の<sup>其</sup>のりくくうあるに改郷  
と弘文院振文院文章院院漢院院礼文  
院とある、少中一生の心血を流する書  
費しとて、そんが固ち改郷より  
とそんが斯くりくくう感をもいひ、何んか南  
ろくさい又治をいふ所のを重なる用ひは  
とて、終つてあるに、いふも村上の命を  
後のことなりと、即ち

廣立院西論居士 いんり村上の命  
院を以てある典校とて是書行ふ廣立院  
又又樂在論とあるの、其つえにの、流



と備院と備院とある

○西論をいふに、紀元四百の隊をを  
計畫するに、五月三十(日)を以て、  
二つくの院に入るに、其の進うそ、  
其のやうに、ある男も、其の進うそ、  
位し、その中西利義能と、その男も、  
手あ、い、あ、い、その男も、  
尾和の扱ひを勤め、其の進うそ、  
その、その、その、その、その、  
その、その、その、その、その、  
その、その、その、その、その、

是る人ありて唯はる人ありてとてふの心面を以て  
ちて年をさるるををりてさるるをえたり一程の  
マニアのちる漢語改らるはてさるるをさるるを執心  
ありて改らるを改らるるを改らるるを改らるるを  
てをえり改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
模型を作らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
一とて改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
と今さの田圃と改らるるの田圃部一の凡そを  
往六七百位と改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるの改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるの改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを

東林堂

是る人ありて唯はる人ありてとてふの心面を以て  
ちて年をさるるををりてさるるをえたり一程の  
マニアのちる漢語改らるはてさるるをさるるを執心  
ありて改らるを改らるるを改らるるを改らるるを  
てをえり改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
模型を作らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
一とて改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
と今さの田圃と改らるるの田圃部一の凡そを  
往六七百位と改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるの改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを  
改らるるの改らるるを改らるるを改らるるを改らるるを







のもしをたきまのふかいらあしこすをたきまのふかいら  
七十のたのやむえづ四十のふかいらあしこすのふかいら  
と左のこどくじあし（五月四日あしこす）

養安院蔵書

讀車

臨濟鐵牛

若狭酒井家之人  
伴氏蔵書

白書書庫

和宗清溪不

太平

鈴屋之印

伴氏所蔵

鐵研文庫

古勢氏蔵書章 慈照院

若餘春梅章

古勢氏家蔵記 梅麩軒

雲烟家蔵書記

獨醒 圖書記 昌平坂之同所

林氏圖書

樂亭又章 白河



素心文庫

素心

三條山慧照院

明倫書記

市野志書

迷庵

待賢書

温存書之庫 不愚文庫

弘前醫官流江氏蔵書記

金岐

八雲軒

脇坂氏

素任梅

桂川家蔵

東叡山蓮圓院

小島氏蔵古印

岸本家蔵古

言齋余文庫

○日本の木版彫刻の精巧なる一事は外國の  
つても誇るるに出来ず、四筆一揮画の  
精巧なるもの多し、近年は彫つてま  
く精巧な彫刻は少く、拙いもの多し、これと  
一つは四筆一揮画の印刷物であらう、自  
己奨励するものあり、此に倣ひ、  
十二年は山崎に離れ、博物館に出張し、  
その古摺画の二筆一揮画の印十枚  
枚を得て、つらく其の画をえり、書きた  
余は是れを刻せしむ、江川源右衛門と木村  
嘉平の二名あり、言ふ精巧なるものあり、  
華



仁清の香合の唐子の圓や九谷の鉢の印、  
の摺画の圓なども言ふ、何れもこれに  
似て、彫つてあるが、これを以て、  
華の圓と四筆一揮画の摺画を  
えり、拙いもの多し、近年は彫つてま  
く精巧な彫刻は少く、拙いもの多し、  
これと一つは四筆一揮画の印刷物であ  
らう、自己奨励するものあり、  
十二年は山崎に離れ、博物館に出  
張し、その古摺画の二筆一揮画の  
印十枚を得て、つらく其の画をえ  
り、書きた余は是れを刻せしむ、  
江川源右衛門と木村嘉平の二名  
あり、言ふ精巧なるものあり、  
○奥州の一、摺画、本州と異なり、  
木版彫刻の精巧なるもの多し、  
近年は彫つてま







先二氏の後三氏もまた於て漸やうと他の方  
而に轉しなうしが山岡氏と北条の人々と世に  
を異しし傳り一切のちとも異しし言を  
氏ハ其言を起し方うも言も義協しん約儀  
とくてもんが自ら愉快しん止するをいふさ  
この状より言有るをたゞや或るウエブス  
マ一の漢後と評し或る亂世と爲定しん  
檄文を草し以て學文をめぐり漢文の釋  
題しん指し論の出つる一紙の十行廿字一  
枚若くは一紙半とすしんやと語く六七枚  
評をしん卒後する能はるしめぬ後出

東條貞盛

て、政堂事法を覺れし更に郵部の形も  
の國體あり論文に記り又は一紙の異彩を放  
ちしつ其の致さるるを述るるしん動  
七すんは冗慢の處を免へる也  
辨る於て於事のし（語の準備せしむ三  
時うも五くも漢訳しんも若くは、さあやさ  
るもけんは或るも意味のそを依しつ  
其のりる其く以て總け行けり若し一紙  
漢字の立ちは謂ゆる早もい所半七八りし  
歎んしん人々候補を立ちし九十六票概  
士に止まらるるぬえしん地方形をいし評者





ふらふらと描いた。ふらふらと筆を動かす人の姿をう

——こと

○岡本保孝のころに改訂された書史のあらわに  
ある、その人の著書が書庫に在りてとある。自ら下  
のあり、四冊のありのありのあり、價二十五圓  
位とある。菊池のあり、ありとある。ありとありの  
ありとありのありとありのあり

○

A blank ledger page with 12 vertical columns and a red border. The columns are of varying widths, with the outermost columns being narrower than the inner ones. There are small red marks on the left edge of the page.

A blank ledger page with 12 vertical columns and a red border. The columns are of varying widths, with the outermost columns being narrower than the inner ones. There are small red marks on the right edge of the page.

東  
洋  
製

以下  
5丁  
白紙

雅三俗七錄五

閱覽室

東  
棟  
原  
製

明治三十八年  
五月上浣起筆

李維其人